

スペインと日本における都市自然の 保全と創造：距離の視点から

Conserving and Creating Urban Nature in Spain and Japan: Thoughts from the Distance

フアン パストール イヴァールス *Juan PASTOR IVARS*

国連大学 -IAS OUIK 研究員
UNU-IAS OUIK Research Associate



文化的距離と物理的距離

私は、建築家・ランドスケープデザイナーとして、スペインと日本で15年間にわたって研究・設計・教育をしてきました。私の作品の中心的なテーマであるランドスケープとの関係は、文化的な距離と物理的な距離によって特徴付けられます。私が、日本のランドスケープに興味を抱いたのは称賛の気持ちからですが、これは文化の違い（文化的な距離）がもたらす効果です。同時に、私がスペインのランドスケープと向き合う時には、場と空間（物理的な距離）が重要です。したがって、距離はランドスケープの本質を捉えるのに役立つと感じます。グローバリゼーションと国家間の移住が進むこの時代に、私は海外から注文を受ける人としてではなく、世界のさまざまな場所に住み、私を取り巻く生物・文化多様性の結果として、職能を発展させる建築家・ランドスケープデザイナーでありたいと思います。そして都市の自然の保全と創造に寄与したいです。

スペイン：オープンスペースの活性化

2004年から2010年、私の仕事はスペイン・デニア市の行政において、オープンスペースを活性化することでした。自動車に占領された歴史的な中心部を、歩行者空間として取り戻すプロジェクトで、市民参加プロセスを通して実施されました。

私見ですが、地中海の景色を特徴付けるのは、太陽の光と石の文化だと思います。そこで私の目的は、デニア市のコンベント教会前の広場（図-1）とマリアナビネダの広場（図-2）で、上質な石畳みを作ることでした。そのデザインのコセプトは、自然現象の抽象化、つまり木の影と海の明るさのイメージです。自然なイメージを得るために、地面から突き出ている唯一の垂直要素は木の幹のみとし、他の人工的な要素（電柱など）が空間のイメージを乱すことはありません。このため街路灯も、向かい合う建物間に架けられた電線に、そのままぶら下がっています。さらに、植栽木には周囲の谷や山の在来樹木であるザクロ、サンザシ、イチゴノキ、セイヨウヒラギガシ、キャロブなどを選びました。これらの果実は、鳥を街に引き寄せます。

私が、オープンスペースをデザインする時、最も重要なこ

とは日本庭園のように、エンブティネス（無）と要素間の関係（間）だと考えています。また七代目小川治兵衛の庭園のように、空間に奥行き（奥）を作ることです。現在、デニア市民はこの空間を楽しみ、社会生活を営んでいます。



図-1 スペイン・デニア市のコンベント広場（2007、著者デザイン）



図-2 スペイン・デニア市マリアナビネダ広場（2010年、筆者デザイン）



図-3 金沢市心連社庭園での清掃活動（2017年、筆者撮影）

日本：都市における持続可能な自然の保全と創造

現在、私は、国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）の研究者として、都市生態系サービスの保全と創造について、2つの方法で研究しています。まず、1）金沢の庭園の保全、維持、活性化を通じた庭園の保存です。次に、2）空き家や空き地を自然に戻すことで生まれる「新たな都市生態系サービス」の創造に取り組んでいます。

1つめの庭園の保存についてです。金沢には、日本庭園の長い伝統があります。これらの庭園は、湧水や市内の用水ネットワークを通じて、周囲の山々から水を受け取ります。兼六園は、全国的にも有名な庭園ですが、他にも城下町には小さな庭園が多くあります。

この種の庭園（泉水路の庭園）は、長野県松代町、福岡県朝倉市秋月、群馬県甘楽町小幡、長崎県島原半島の旧神代村など、日本各地に存在します。金沢の庭園は、美的、生物学的にも高い価値を持っています。水のある庭園は、多くの生き物に生息場所を提供し、都市の生物多様性を高めます。しかし現在、所有者の高齢化などによってこれらの庭園のいくつかは管理放棄されかけており、維持するためには外部の支援を必要としています。

そこで私たちは、金沢市内の庭園の維持管理を支援するために、ボランティアグループを組織し、庭園の清掃作業、落ち葉拾い、草取り、池の泥上げなどの活動を、試験的に始めました（図-3）。ボランティアグループには、住民と観光客の両方を引き入れ、都市レベルでのエコツーリズムの可能性を広げようとしています。この結果として、所有者とボランティア間のつながりができ、都市の自然を維持することの難しさが参加者同士で理解されるようになりました。さらにそのことが、人間が自然からもたらされる無形の利益（幸福感）につながっているように思います。

2つめの空き家や空き地を活用した「新たな都市生態系サービス」の創造についてです。私は地元の団体と協力して、金沢市の伝統地区である「東山ひがし」および「卯辰山麓」などの自然と人の暮らしの境界地域や、用水に隣接する土地を調査して、周囲の自然を取り込み、街の中心に緑の回廊を作るための調査をしています（図-4）。これまでのところ、市民の半数は空き家や空き地を緑地に変える考えを受け入れている印象です。建築やランドスケープデザインの専門家として、今後、空き家や空き地を緑に転換するための実行可能なプランを市民に提供することが重要だと思っています。

これまでに学んだことと、新たなチャレンジ

日本とスペインは、どちらも高齢化が進む社会です。持続可能な方法で都市の自然を保全し、創造する上で、様々な可能性と課題があります。日本では、市民が積極的にボランティ

アのグループを作り、行政と協力して都市生態系サービスを維持することができると考えます。一方で、空き家や空き地を再利用して都市の自然を創造することに関しては、両国の行政機関に働きかけてみた私の経験によると、現時点では、スペインの方がより現実的です。その理由は、スペインでは民間部門に対する行政の権限が法律で保障されており、トップダウン型の都市形成（伝統的なまちづくりなど）が可能だからです。それに対して日本では、民間部門の力が強く、空き家や空き地の再利用を可能にするための法律の変更には、長い時間がかかるでしょう。そのため、市民を中心としたボトムアップ型のまちづくりが必要であり、市民グループが、専門家と戦略的な計画を立て、そして行政に解決可能な策を提案しなければなりません。これらすべての過程に、若い日本の建築家やランドスケープデザイナーに関わってほしいと思います。また、海外を体験し、多様な社会の中で解決策を提案する経験を奨励したいです。

（略歴）

2005年からスペインの建物、広場の設計に関わる。2009年来日、2012年に京都工芸繊維大学建築設計学専攻修士課程を修了。2012年、京都大学大学院農学研究科にて日本学術振興会外国人特別研究員。2013年、京都学園大学バイオ環境デザイン学科実験実習指導助手。2015年3月、スペインのヴァレンシア工科大学で「間と奥、七代目小川治兵衛と近代日本庭園」と題した博士論文を執筆し、建築設計博士（日本庭園）を取得。2016年より現職。

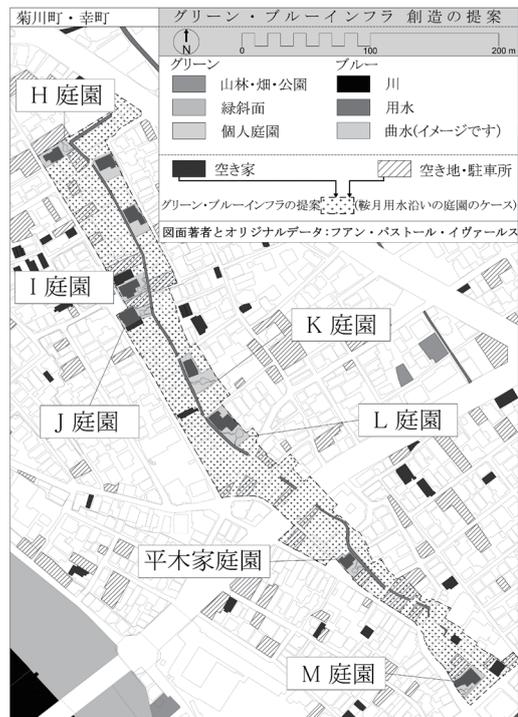


図-4 グリーンインフラ・ブルーインフラを創造する庭園群金沢市菊川町・幸町「鞍月用水沿い庭園群」（2018年、筆者作図）